

神話としての『君たちはどう生きるか』の哲学 — 西田の純粹経験を手引きとして —  
The philosophy of "How Do You Live?" as a myth - Using Nishida's pure experience as a  
guide -

森下温美 Atsumi Morishita

本発表は、宮崎駿の長編アニメーション映画作品『君たちはどう生きるか (2023)』の哲学について考察するものである。

伝え聞くところによれば、本作（以下「宮崎作」と表記）は、同名の吉野源三郎による『君たちはどう生きるか (1937)』（以下「吉野作」と表記）に感化され、自伝的内容として誕生した神話のようである。吉野作は、実父を亡くした少年コペルの心が叔父との対話を通じて成長する物語である。宮崎作は、戦火で実母を亡くした少年真人が疎開先で神隠しの世界に流入し、現実に戻還することを意志するまでの物語である。真人の体験は、プロローグとエピローグで言語化されているが、その間の体験はただ体験されるだけで、回想すらされない。本作は「NO 宣伝戦略」が採られた初のドルビーシネマ対応作品であり、見る側にも同様の態度を強いる哲学的心理実験装置である。時空の切り替わりが脈絡なく感じられる展開は、意識の流れ（ウィリアム・ジェームズ）に影響を受けた文学のようでありながら、夢や幻覚を見ている自覚もないままに、十牛図や観無量寿経（流注）のイメージが融合した神隠しの世界に流入させられた真人は、やがて有為の奥山を超え、自傷行為を「善」の不徹底としての「悪意のしるし」と自覚し、二河の譬え的に生きることを意志するようになる。

吉野作の思索次元を、同時代のユング心理学の自己実現よりも心理主義的に、コペルニクスの転回を成した善の過程の場所が宮崎作の神隠しのようなものであったかどうかはわからない。本作は、日本人の歴史的な身体を映し続けてきたスタジオジブリに底流する哲学が、以上のようなものであったことを最期に表明したものであろうか。